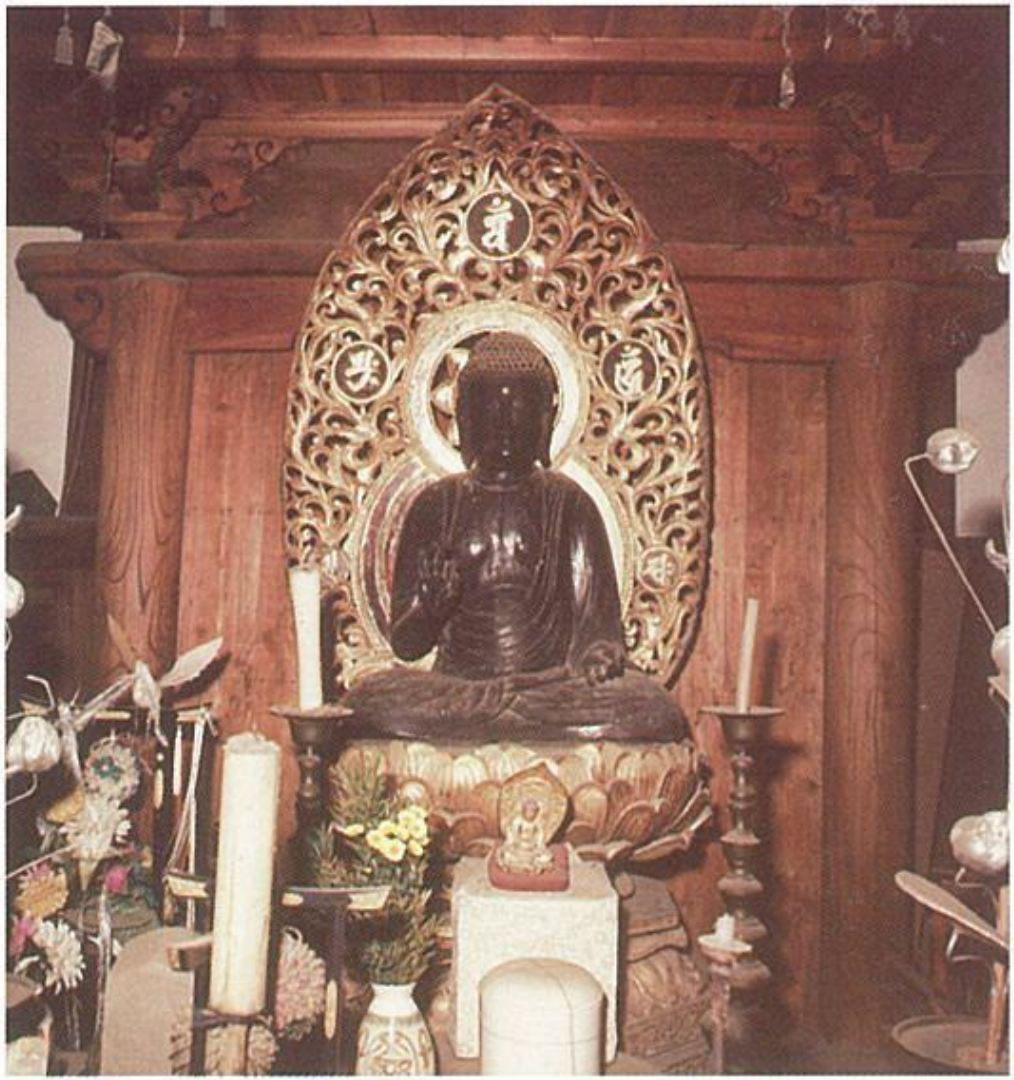
大堂阿弥陀如来坐像

（だいどう　あみだにょらい　ざぞう）

板橋区登録有形文化財（彫刻）　平成5年3月24日登録

所在地：板橋区赤塚8-4-9　松月院　松宝閣
交　通：東武東上線「下赤塚駅」徒歩18分
都営三田線「西高島平駅」徒歩20分
国際興業バス「赤塚八丁目」徒歩2分
［成増駅北口⇔赤羽駅西口
（赤02・赤02-2）］

大堂は、勝参山と号し、~~17~~19世紀前半に成立した『新編武蔵風土記』によれば、建武・延元頃（14世紀前半）に七堂伽藍の荘厳を保ち、十二の脇坊があったことから、「大堂」と呼称されるようになったといわれています。

本尊の阿弥陀如来は、木造で黒漆塗り、来迎印を結び結跏趺坐をしています。平安時代後期の様式を示していることから、もともとの造像は12世紀頃に遡るものとされています。像内には天正2年（1574）と万治2年（1659）に本像が修復を行った際の墨書銘が残されています。修復は大規模なもので、造像当初の部分は体部前面材のみであるとされています。

十方庵敬順による紀行、『遊歴雑記』初編（文化11年・1814序）にも、「赤塚村大堂の古鐘銘」の中で本像が紹介されており、永禄4年（1561）の上杉謙信による小田原城包囲の途上、上杉軍が赤塚郷を通行した際に大堂が放火されたことを記し、「…本尊の弥陀御脇腹に焼けたる跡の顕然たるは是なり…」と続けています。中世の罹災伝承と坐像修復期との連関がうかがわれます。